
ケータイ小説

もきゅっ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ケータイ小説

【Nコード】

N7975P

【作者名】

もきゅっ

【あらすじ】

私は、彼氏ともう一ヶ月以上会っていない。

彼が今まで私にしてきた行為を振り返ると腹が立ち、私はある凶行に出る。

私は、最近全くかまってくれない彼に嫌気を覚えた。

かれこれ一ヶ月以上、話しかけようと、ましてや私と会おうともしてくれなかったから。

あれだけ沢山私とおしゃべりしてくれたのに。

なんで？　なんでだろう？

とにかく、私の心の内側からは、黒いもやもやしたものが滲み出ていた。

思えば彼には腹が立つことばかりされた。

自分はこんなに友達が多いんだ、と自慢してきた。

そしてその友達の情報や性格を私に一方的に教えてきた。

さらに、その友達と不仲になると、今度は私に八つ当たりしてきた。

……よくよく考えてみれば、私もよく耐えたものだ。

今の今まで耐えることができたのは、それでも私を彼は愛していたし、

私もまた彼を愛していたからであろう。

だが、それとこれは今やどうでもよく感じた。

私は彼の教えてくれた友人の一人「コウスケ」にメールを送ることにした。

そう、彼の名を騙って。

その内容かというと、一般的に見た人が不快になりそうな内容。

そこまで詳しくその人との関係は知らないから、あくまでも適当に。

数分程待っても、「コウスケ」からのメールは来なかった。

なんだか面白みに欠けるため、次に私は「タツヤ」に白羽の矢を立てる。

内容なんてコウスケに宛てたものを同じでいいだろう。

ただ、それだと私が面白くない。

私は考えて考えて、悪質な文章を搾り出した。

結果、単純にこの前貸したアレ返せ、といった内容にした。

数分考え込んだ結果がこれなんて、少し自分でも呆れた。

もちろん事実どうであるかなんか知らない。

口からでまかせ、でたらめな内容だった。

が、思いの外返信が来るのはとても早かった。

「どうしてだよ！　なんで、なんで」

相手のメールはその一文のみ。

もしかしたら、本当に彼はタクヤに何かを貸していたのだろうか？

まあ、何はともあれ人に物を借りておいてその言い草、とても常識のある人物とは思えなかった。

以降私は返信することをやめると、次に「ユウジ」にメールを送ることにした。

一度悪事になれてしまうと、流れるように次の対象を求めてしまう。自分で自分が、少し怖かった。

罪悪感に苛まれては何も出来ない。

私はその度に彼のことを思い出して、自身を奮い立たせた。

さて、メールの本文はどうしよう。

また少しの間考えて、単純にチーンメールのような文章を送りつけてやることにした。

「このメールをまわさなきゃ死ぬ」といった、まあ古典的なテンプレートの内容そのものだった。

送信してから数分後に、「ユウジ」からの返信が来た。

「やばいよおれほんとうにしぬの？やばいよ」

全て平仮名で、それを見た私は思わず噴出しそうになった。低すぎる国語力と、それからこんなことで怖がるのかと二つの要素で。

ひとしきり笑い飛ばすと、私は次に「ユカリ」にメールを送ろうとした。

……「ユカリ」？

名前から私が想像する性別は、女。

何故？

彼の女友達？

嘘だ、ならばこんなに詳しく私に彼女の事を教えたりしない。

支離滅裂。

無茶苦茶。

メール内容を四つの漢字で表すならこうだった。
でたために、狂ったように悪口を並べる私。

何かが吹っ切れたように送信する私。

メールを送ってから数秒後、あらぬ速さで返信は来た。

「本当に、本当に送ったのはあんたなの？ねえねえ」
彼の名を騙っていることが悟られたか、と少し焦った。

が、私は新たな文章を考えるべく時間を費やす。

どうしてだ。

どうしてなんだ。

これ以上、考えられない。

それどころか、私の意識が少しずつ遠のいて

「充電して下さい」

その日は雨が降っていたから、教室の中も昼間だというのに薄暗かった。

「なあ、昨日お前にもメール来た？」

「来た来た。気味が悪いよな」

そんな何処か空気の淀んだ教室は、一つの話題で持ちきりみたいだった。

男子生徒が話しながら、教室の隅の方を見る。
一番後ろで端の、机に花瓶が置かれた席。

「勝手に死んだくせにさ、俺らなんかしたか？」

「さあな、噂ではふられたって話だぜ」

そんな話を他所に、すぐそばの席にいる女子生徒が、雨模様の窓の外を見つめていた。

死した恋人から送られた、意味不明の内容が書き散らかされたメールを開いてため息をつく彼女。

「受信メール一件 削除しました」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7975p/>

ケータイ小説

2011年1月3日23時57分発行